川に住む生きものたちの暮らし。

上流

冷たくきれいな水の中でくらすイワナとヤマメ

川の上流は一年をとおして水温が低く、人家や工場などからの排水が少ないので、水があまりよごれていない。上流には、そういう「冷たくて、きれいな水」の好きな生きものがいる。上流の魚といえば、イワナとヤマメだ。

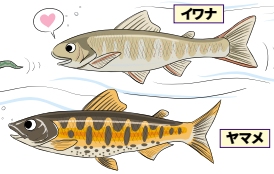
●食いしんぼうのイワナたち

イワナはなわばりをもち、虫や魚、それにカエルやヘビまで食べてしまう。ヤマメも食べものにはどんよくで、口に入るものはほとんど食べる。これは中流や下流にくらべると、えさがそれほど豊富ではないからだ。

ところで、なぜ、イワナやヤマメは水の冷たい上流にすんでいるんだろう？

これは、イワナやヤマメの祖先が、遠いむかしの氷河期に、水の冷たい海からやってきたからといわれている。やがて氷河期が終わり、祖先たちは海へ帰ろうとしたが、海の水があたたかくなっていて帰れない。それで、水の冷たい川の上流ですむようになったということだ。これを「陸封（りくふう）」という。ちなみにイワナもヤマメもサケのなかまだ。

上流の代表的な魚では、ほかにカジカがいる。カジカは川の石の下にいることが多く、からだの色を石と同じ色に変えることができる。たまごをうみつけるのも石の下で、それをおすが守る。



●サワガニの日なたぼっこ

サワガニも、イワナやヤマメと同じように、水の冷たくてきれいな上流でしかすむことができない。でも、あまり冷たすぎるのは苦手なようで、体温が下がりすぎないよう、ときどき岩の上で「日なたぼっこ」をする。

サワガニのように、カニのなかまで「淡水（たんすい）」（川の水のような真水（まみず）のこと）の中で一生をすごす」ものは実はめずらしい。九州から北にすむカニでは、このサワガニ一種しかいない。サワガニには赤・青・ピンク・茶色など、いろんな色の個体がある。

上流の岩の上で「ヒュルル、ルルル…」と笛のようになくのは、カジカガエル。それから、上流にはサンショウウオ（利根川水系ではハコネサンショウウオ、クロサンショウウオなど）もすんでいる。

●水中を歩いて食事する鳥

上流の水べにすむ鳥、カワセミは魚とりの名人。木の上でまちかまえて、すばやくダイビングしてくちばしで魚をとらえる。そのつかまえ方がみごとなので、カワセミのことを英語で「キングフィッシャー（魚とりの王様）」という。魚はまる飲みして、骨はまとめてはき出す。

上流にすむカワガラスも、えさをとるのがうまいけど、こちらはちょっと変わっている。川の中へもぐって、水中を歩きながら、虫やカニやエビなどを探して食べるんだ。

川の中には昆虫の幼虫もすんでいる。そのなかでヒゲナガカワトビケラの幼虫は、水中にあみをはってえさ（藻など）をとる。クモみたいだね。

中流

ふちと瀬の流れ　魚の種類も豊か　代表選手はアユ

川の中流になると、上流よりも水温が上がる。深くて流れのゆるやかな「ふち」が多くなり、浅くて流れの急な「瀬（せぜ）」（浅瀬）もある。そういう環境のなかで、魚の種類はぐんと増える。なかでも中流の魚の代表選手といえば、「群馬県の魚」にもなっている「アユ」だ。

●アユはからだをはって…

アユは、川の中の石についている水アカ（藻が石について固まったもの）をけずりとって食べる。そして、その石を中心になわばりをもつ。自分のなわばりに、ほかのアユなどが近づくと、体当たりをしておいはらう。アユをつるときに「友づり」といって、えさではなく、おとりを使う（生きているアユに糸をつけて泳がせる）のは、このアユの習性を利用したものだ。

ところで、アユは、もともと海と川を行ったり来たりする魚だ。

秋、川の中流にうみつけられたたまごがかえると、子どものアユ（稚アユ）は川をくだり、やがて海へ出る。海で冬をこして、春になると、こんどは川をのぼり、秋に中流でたまごをうむ。そして、アユは一年間の一生を終える。こんなふうに、海と川を行き来することを「回遊（かいゆう）」という。

これがアユの自然の姿だけど、いまの利根川水系のアユは、ほとんどが人間の手で放流されたもので、回遊することはない。

●コイのヒゲはなんのため？

中流から下流にかけて、川底にどろがつもっているようなところでは、コイ、ドジョウ、ナマズなどが住んでいる。これらの魚に共通していること。それは、「ヒゲがある」ということだ。

このヒゲ、いったい、なんのためにあるんだろ

●川の生きものを観察できる施設―１

「水上町水紀行館」（利根郡水上町）

水上町の玄関口にあり、観光地水上の情報発信基地でもあります。水紀行館は、水に親しみ、水を知り、水に棲む生物など水にこだわった施設です。淡水魚の水族館は、利根川上流域にすむ魚を中心とした生きものたちを見ることができます。トンネル型の水槽は、川の中に居るようで楽しいですよ。◎入館料：一般三百円、大学・高校生百円、中学生以下無料◎電話０２７８・７２・１４２５◎休館日：毎月第二・四火曜日

●川に住む生きものたちの暮らし

下流

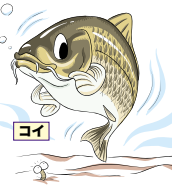
いろいろな水がまざりあう下流 魚たちのふしぎ

川の下流は、さまざまな排水が集まってくる、河口に近くなると、海水もまざる。そんな環境の変化のなかで、よこれた水に強い魚がすんでいる。

う？　それは、コイたちがすんでいるところに関係がある。

つまり、コイたちは川の虫などをえさにする。ところが、川底にはどろがつもり、水もにごっている。そこで、ヒゲを使って、どろの中の虫などを探すというわけ。

ヒゲのあるコイのなかまは、ニゴイ、ムギツク、ツチフキ、カマツカ、イトモロコなど、たくさんいる。



●水中で生きる昆虫の子ども

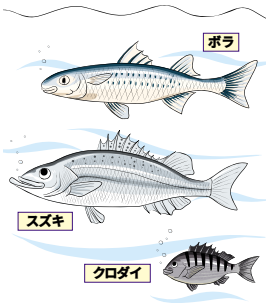
中流には、上流から流されてきた砂や土がたまり、広い川原がつくられる。そこには、昆虫をはじめ、さまざまな生きものがすんでいる。

そして、川の中にも、石の下などにたくさんの虫たちがいる。それは昆虫の幼虫が多い。たとえば、トンボ（ヤマサナエ、アオサナエ、コオニヤンマなど）のヤゴ、カゲロウの幼虫など。

昆虫なのに、なぜ水の中で生きられるのか、といえば、それは水の中の酸素をとって呼吸しているから。

ヤゴは、おなかの中にえらがあって、おしりから水を出し入れして酸素をとりいれている。からだ全体がポンプになっているわけだね。カゲロウの幼虫は、わきばらにえらがあって、それを小きざみにふるわせて酸素をとりいれている。

河口近くでは、ボラ、スズキ、クロダイ、クサフグなど、海にすむ魚を見ることもできる。



●タナゴは貝の中で子育て？

タナゴは、ちょっと変わった子育て(？)をする魚。生きている大きな二枚貝の中にたまごをうむ。子どもは、たまごから稚魚にかえるまでの期間を貝の中ですごす。貝の中なら安全だし、また、貝のえら呼吸で貝の中にはいつもきれいな水が送りこまれていて、環境もいいというわけ。稚魚にかえっても、しばらくは貝の中にいて、少し成長してから外に出ていく。これは子育てというよりも、ほとんど貝まかせ。

イトヨというトゲウオのなかまは、めすがたまごをうむとき、おすが水草を集めて巣をつくる。たまごがうまれると、おすはつきっきりで巣を守り、たまごのめんどうを見る。ときどき、巣のまわりの水がよどまないよう、きれいな水をおくろうとする。これは、ほとんど育児パパ。

下流の魚の中で、ふしぎなのはギンブナ（もっともふつうのフナ）。この魚は、ほとんどめすだけ。これには、同じなかまのおすが相手でなくても、めすがたまごをうむという、とくべつなしくみがあるらしい。

●南の海でたまごをうむウナギ

ウナギといえば「うな重」を思いうかべるけど、あれはほとんど養殖もの。天然のウナギは川の下流などにすんでいる。

ウナギが変わっているのは、サケやアユのように「回遊」する魚がたまごをうむのは安全な川がほとんどなのに、ウナギだけは南の海まで行ってたまごをうむということ。

めすのウナギはたまごをうむために川から海に出て、はるか遠く、沖縄よりもっと南のほうの海まで行き、たまごをうむ。生まれた子どもは、海流にのって長い海の旅をつづけ、陸地までたどりつき、川をのぼる。

ちなみに、すこし昔のはなしだけど、昭和五十年に利根川の下流で体長131・5センチという日本最大級のウナギがとれたことがある。

●ウシガエルとザリガニの関係

ウシガエルという大きなカエル、見たことあるかな？　体長20センチになるものもあり、「ブオー、ブオー」と大きな低い声でなく。沼にもいるけど、川の下流にもいる。

このウシガエルは「食用ガエル」といって、昭和のはじめごろ、アメリカから食用として養殖するために日本に来たものなんだ。そのとき、ウシガエルのえさとして、いっしょにアメリカから運ばれてきたのが、アメリカザリガニというわけ。これもいま、沼や川の下流にいる。

こういうふうに、外国から運ばれてきて日本にすみつくことを「帰化（きか）」という。

利根川の魚の中にも、放流されたり、あるいは勝手に放されたりして、帰化した外国の魚がかなりいるんだ。

●川の生きものを観察できる施設―2

「群馬県水産学習館」（館林市）

群馬県に生息している魚類を中心に、両生類、は虫類、甲殻類などを一堂に展示した淡水生物専門の水族館方式の学習施設です。国指定天然記念物のミヤコタナゴなどが見られます。

◎観覧料：一般二百円、大学・高校生百円、中学生以下無料

◎電話　0276・75・1185

◎休館日：毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日、十二月二十七日～一月五日